

【特集：忘却されざる記憶—60年後からみるマラヤ建国】

マラヤの脱植民地化と歴史の見直し

マレー・ムスリムの視角から

坪井祐司

はじめに

本論は、シンポジウムのテーマであったマラヤ（マレーシア）の脱植民地化をめぐる歴史の見直しの動きについて、主にマレー・ムスリムの視角から再検討するものである。

歴史を語ることは、現在から過去を振り返る行為であり、過去の事象のみならず、どのような立場から過去を見るかという現在の視点も反映される。立脚点である現在が常に動いているという意味で、歴史は常に見直されているといえる。とくに、現在に直結する近現代史は、歴史を描く現在の立場に影響を受けやすい。

マレーシアは、1957年にマラヤ連邦として植民地からの独立を果たした新しい国家である。国家建設の過程で、マレーシア国内における歴史認識は、「国家／国民の歴史（ナショナル・ヒストリー）」という枠組みの影響を強く受けてきた。こうした認識のもとでは、現在の国民国家の建設にいかに関与したかという視角から歴史が語られる傾向にあり、そうでないとみなされた人びとや出来事は過小評価されがちである。

現在の国家としてのマレーシアのアイデンティティの一つが多民族社会である。とくに、マレー人、華人、インド人を中心とする複数の民族が権力を分け合いつつ共存するという言説は強い影響力を持つ。マレーシアの脱植民地化は、統一マレー国民組織（United Malays National Organisation: UMNO）、マラヤ（のちマレーシア）華人協会（Malayan/Malaysian Chinese Association: MCA）、マラヤ（のちマレーシア）インド人会議（Malayan/Malaysian Indian Congress: MIC）というマレー人、華人、インド人の三民族を代表する政党が形成した連盟党（Alliance）により主導された。この政治ブロックは、再編を経ながらも、独立から2018年まで60年余り一貫して政権与党を構成してきた。民族政党の連携による独立、国家建設という言説の正統性は強固なものであった。

ただし、近年になって、歴史の見直しというべき現象も見られるようになった。脱植民地化に関しても、従来過小評価されてきた勢力や運動の再評価が進みつつある。映画「不即不離」でとりあげられたマラヤ共産党および左派勢力がその例である。これには二つの要因が考えられる。一つは、新たな歴史的事実の発掘である。現代史に関しては、未公開

の公文書の公開や回顧録やオーラルヒストリーによる当事者の証言などにより、従来の歴史叙述が修正を迫られるケースは少なくない<sup>1</sup>。二点目は、現在的な視点の変化である。民族政党の連立によって成立した連盟党は、その後国民戦線 (Barisan Nasional) への再編を経ながら、独立後一貫して政権の座にあったが、近年は野党と勢力が拮抗する状況となり、2018年5月の総選挙に敗北して与党から転落した。この政治状況の変化にともない、歴史認識の正統性を相対化する試みがなされているとも考えられる。

本論では、こうした問題意識をもとに、マラヤ・シンガポールの脱植民地化をめぐるマレー・ムスリムの側からの歴史の見直しについて概況を紹介する<sup>2</sup>。第1節では、現在のマレーシアのナショナル・ヒストリーの立場からみた脱植民地化に関する歴史認識を整理する。第2節では、「マレー人左派 (Malay Left)」を中心としたマレー人の野党勢力についての最近の研究動向を紹介する。第3節では、マラヤ (マレーシア) の国内政治の枠に収まらない運動としてイスラム勢力をとりあげ、特に筆者が注目するマレー語誌『カラム (Qalam)』に代表される越境するムスリムからの国民国家に対する視角について論じる。最後に、マレーシアにおける歴史の見直しに関する今後の展望をまとめたい。

## I マレーシアのナショナル・ヒストリーにおける脱植民地化

### 1. 民族政党の連立体制

本節では、現在のマレーシアのナショナル・ヒストリーにおける脱植民地化の過程について、簡単に整理しておきたい。その一番の強調点は、民族間の協力である。第二次大戦後、マレー人、華人、インド人という民族ごとに結成された政党の連立体制が形成され、イギリスとの交渉により独立が達成された。その後の国家建設も、民族を単位とした交渉や妥協の過程とみなされる。

マレーシアの前身のマラヤ連邦は、1957年にイギリスから独立した。戦前のイギリス領マラヤ (現在の半島部マレーシアおよびシンガポール) は、直轄植民地の海峡植民地 (シンガポール、ペナン、マラッカ) と保護領のマレー州9州からなっていた。マレー州は、マレー王権の顧問となったイギリス人行政官による間接統治体制であり、形式上はマレー王権が存続していた。第二次世界大戦の日本軍政期を経てマラヤに復帰したイギリスは行政を再編し、1946年にマラヤ連合 (Malayan Union) を発足させた。直轄植民地として分離したシンガポールを除き、ペナン、マラッカと9つのマレー州を連邦化したので

1 マラヤの脱植民地化をめぐる政治過程については、イギリスやアメリカの公文書の公開などにより、国際関係の分野でも歴史の見直しがなされている。ただし、本論では現在のマレーシアの文脈で議論を進めるため、分析の対象外とした。

2 歴史の見直し全体を考慮する場合には、華語文献の参照も不可欠であるが、本論はマレー・ムスリムに焦点をあてるため、分析の対象を英語、マレー語の文献に限定した。

ある。しかし、マレー王権が地位を奪われたこと、出生地主義にもとづく市民権の獲得条件が華人やインド人にとって比較的有利であったことに対して、マレー人の反発が強まった。マレー民族主義が高揚し、同年5月にマレー人政党の UMNO が結成された。

イギリスはマレー人の反発に配慮して UMNO や王族の意見を容れ、1948年にマラヤ連合をマラヤ連邦 (Federation of Malaya) へと再々編した。マラヤ連邦では、王権の地位が保証され、市民権の獲得要件も厳格化されたが、これは逆に非マレー人の反発を招いた。同年、華人を主たる構成員とするマラヤ共産党の武装蜂起が起ると、イギリスは6月に「非常事態」を宣言し、鎮圧作戦を展開した。マラヤは内戦状態となったのである。一方で、華人の穏健派は1949年に MCA を結成した。UMNO と MCA は1951年に連盟党を結成し、1954年にはそこに MIC が加わった。三民族の政党ブロックである連盟党は1955年の総選挙で勝利し、イギリスとの交渉により独立を勝ち取った。この脱植民地化の過程は、マレー人、華人、インド人という三民族の政党の運動を軸に描かれてきた<sup>3</sup>。連盟党 (のち国民戦線) の正統性は、こうした歴史認識により担保されてきた。

一方で、こうしたナショナル・ヒストリーにもとづく歴史叙述においては、この連盟党およびその構成員以外の勢力は過小評価されることになる。イギリスおよび独立後の民族主義の右派勢力に対抗した共産党を中心とする左派勢力は、国家建設を妨害した勢力として過小評価どころかマイナスに評価されかねない。

## 2. 公式の歴史認識における「非常事態」

政府による公的な歴史認識の一例として、マレーシア国立博物館の展示をとりあげてみたい<sup>4</sup>。クアラルンプルの国立博物館では、4つの展示ギャラリーでマレーシアの歴史を紹介している。年代順にギャラリー A が先史時代、B がマレー王朝時代、C が植民地時代であり、脱植民地化から独立以降を扱うのがギャラリー D である。そこでは、入口のイントロダクションにて、独立が達成された1957年8月31日を最も歴史的な日であると強調する。独立に至る過程として、「社会的意識とナショナリズム精神の覚醒」が紹介され、主にマレー・ナショナリズムの高揚の過程が説明される。扱いは小さいものの、華人、インド人のナショナリズムについての説明もある。

次に大きなスペースが割かれているのが「非常事態」のコーナーである。ここでは、①イントロダクション、②破壊と痛み、③対共産党戦略、④バリン会談 (1955年)<sup>5</sup>、

<sup>3</sup> この時期の政治過程としては、(Mohamed Noordin, 1976)などを参照。マラヤ連邦独立の際の憲法の制定過程も、民族間の交渉による政治の典型とみなされる (Fernando, 2002)。

<sup>4</sup> 以下は、2018年2月に筆者が同博物館を訪問した時点での展示内容である。

<sup>5</sup> イギリス軍は鎮圧作戦によりマラヤ中央部を制圧したが、共産党は北部のタイとの国境の山岳地域を拠点に抵抗を続けた。独立をめざす UMNO 党首のアブドゥルラーマン (Tunku Abdul Rahman) は共産党との和解を試み、1955年にクダ州バリン (Baling) で共産党との会談を行ったものの、決裂に終わった。

⑤非常事態の終了(1960年)、⑥ハジャイ和平協定(1989年)という年代順に6つのパネルで解説がなされている。②では共産党が暴力的な戦略で経済の転覆をはかったこと、③ではそれに対してイギリス政府が軍事的な手段だけでなく社会経済的な対策を取ったことが記されている。前者として挙げられるのはマレー人部隊の強化であり、後者が「新村(Kampung Baru)」の建設である。

マラヤ共産党については、別個に以下のような紹介がなされている。「マラヤ共産党は1930年に結成された。マラヤ共産党の主要な目的はマラヤ共産主義共和国(Republik Komunis Malaya)の樹立であった。1948~60年にかけて、テロによるマラヤ共産党による武装反乱は、マラヤの社会・経済・政治に不安定をもたらした。テロリストにより人々の生活は脅かされ、公共のインフラは破壊された」。

その隣のパネルには、共産党勢力と対峙した植民体制下におけるマレー人部隊の解説がなされている。そこでは、植民地下の1933年に組織されたマレー人部隊は、対日戦争でも能力を示し、1950年に大幅に強化されたと書かれている。ここから、政府の歴史認識の立場は明らかである。共産党は国家建設を妨害する存在であり、その鎮圧が当時のマラヤへの貢献と考えられているのである。

## II マラヤの脱植民地化とマレー人左派

### 1. マレー人左派の系譜

本節では、マラヤの独立を主導した右派・民族主義勢力に対峙した左派勢力に関する最近の研究動向について、マレー人左派を中心に整理してみたい。マレーシア国内において、連盟党(右派)に敵対していた左派勢力については、研究自体が簡単ではなかった。しかし、近年になって再評価が進みつつある。

象徴的な契機は、冷戦の終結とマレーシア政府とマラヤ共産党の和解(1989年)であろう。時間の経過とともに当事者たちが現役を退き、共産党の存在が政治問題から歴史問題へと転化した。完全にとは言わないまでも、ある程度までは発言・表現することが可能となったのである。マラヤ共産党書記長として武装闘争を指揮していたチン・ペン(Chin Peng, 陳平)<sup>6</sup>の回顧録が出されるなど、当事者の語りが公になり<sup>7</sup>、記録・記憶の掘り起しが進んでいる<sup>8</sup>。

<sup>6</sup> 本名オン・ブンファ(王文華 Ong Boon Hua, 1924~2013)。和平協定後はタイに亡命していたが、2000年代に入って回顧録やインタビュー記録が出版された(Chin, 2003; Chin and Hack, 2004)。

<sup>7</sup> 指導者の記録のみならず、イギリスによる強制移住により形成された新村の建設過程の研究などを通じて、当時の華人住民の生活についても解明がすすめられている(Ho, 2004)。

<sup>8</sup> ただし、年月の経過は当事者の高齢化をも意味するので、今後はオーラルヒストリーによる新たな事実や証言の発掘は困難になっていくことも予想される。

この流れのなかに位置づけられるのが、マレー人左派への関心の高まりである。マレー民族主義については多くの研究蓄積があるが、従来は UMNO につらなる右派勢力の系譜に焦点が当てられてきた。戦前のマレー民族主義の萌芽期を分析したロフは、民族主義指導者を王族・貴族、イスラム知識人、土着の知識人の三層に分類し、王族層が主導権を握っていく過程を明らかにした (Roff, 1994)。同じく戦前のマレー人の政治運動を扱ったミルナーは、マレー人のアイデンティティを王権、イスラム、民族という三極に整理し、民族へと収斂していく過程を論じた (Milner, 1995)。戦後のマレー民族主義の政治運動を主導した UMNO は、王族・貴族に代表されるマレー人社会の伝統指導者層を中核として形成されたのである。

一方で、こうしたマレー民族主義・右派に対抗する左派の流れも戦前から存在した。マレー人左派の運動を包括的に扱った研究として、(Aljunied, 2015) などがある。右派が基本的にイギリスとの協調路線であったのに対し、左派は反植民地を打ち出し、民族的に近いインドネシア (オランダ領東インド) との植民地を越えた統合を志向した。左派の運動は共産主義の影響を受けており、とくにインドネシア共産党との関係も指摘される。マレー人左派による最初期の組織として、1938 年にクアラランプルで結成された青年マレー人同盟 (Kesatuan Melayu Muda: KMM) がある。その代表イブラヒム・ヤアコブ (Ibrahim Yaacob)<sup>9</sup>、副代表ムスタファ・フサイン (Mustapha Hussain)<sup>10</sup> らは、マレー人左派の第一世代というべき人々である。1920 年代に拡大した学校教育に触れた彼らは、新聞・雑誌の活字メディアの普及の影響を受け、急進的な言論活動を展開した。

KMM の流れをくむ左派勢力が戦後に結成した政党が 1945 年 10 月に結成されたマラヤ・マレー国民党 (Partai Kebangsaan Melayu Malaya: PKMM) であった。その指導者ブルハヌッディン・アルヘルミ (Burhanuddin Al-Helmy)<sup>11</sup>、アフマド・ブスタマム (Ahmad Boestamam)<sup>12</sup> は、戦前の KMM の参加者であり、人的な系譜関係がある。

<sup>9</sup> イブラヒム・ヤアコブ (1910~1979) は、スルタンイドリス師範学校 (Sultan Idris Training College) を卒業後、教師を経てジャーナリストとなり、KMM を結成した。戦争中は日本軍と協力して独立を目指したが、戦後は、他の左派の指導者とともに分かつ形でインドネシアにわたり、スカルノとの連携を試みた。伝記として (Bachtiar, 1985) がある。

<sup>10</sup> ムスタファ・フサイン (1910~1987) は植民地教育を受けて官僚となったものの、のちに社会主義に傾倒し、KMM の副代表となった。戦後は PKMM に参加したが、非常事態により PKMM が分裂状態になると、UMNO に加入した。回顧録として (Mustapha, 1999) がある。

<sup>11</sup> ブルハヌッディン・アルヘルミ (1911~1969) はインドで教育を受け、シンガポールの宗教学校でアラビア語を教えていた。戦争直前に KMM に加わり、戦後の PKMM の設立に参加した。その後シンガポールでナドラ問題の抗議に携わるが、暴動により逮捕された (第 III 節参照)。釈放後はマラヤに戻り、1956 年に PAS の党首となった。伝記として (Ramlah, 2003) がある。

<sup>12</sup> 本名はアブドゥッラー・タニ・ビン・ラジャ・クチル (Abdullah Thani bin Raja Kechil, 1920~1983) は第二次大戦の直前に KMM に加入し、戦後の PKMM の中心的存在となった。1948 年に投獄されたが、1955 年に釈放された後は左派のマラヤ人民党 (Parti Rakyat Malaya) の結成に参加した。

PKMMは、すべての階層のマレー人の団結を掲げた。ブルハヌッディンが宗教学校からリクルートを行うなど、左派にくわえてイスラム知識人まで組織を広げた。綱領では植民地からの独立や自由主義を強調し、インドネシアとの協働を唱えた。マラヤ連合に対する反対運動の過程でUMNOが結成されたが、即時独立を主張するPKMMは最終的にUMNOから離脱し、独自路線を貫いた (Aljunied, 2015: 101-131)。

マレー人左派は、民族を越えた左派勢力の連携を模索した。1947年2月、PKMMはマレー系の組織と共同でPUTERA (Pusat Tenaga Rakyat) を結成し、3月には主に非マレー系の組織が主導する全マラヤ共同行動評議会 (All Malaya Council for Joint Action: AMJCA) との共同戦線を組んだ。PUTERA-AMJCA連合は、イギリス主導でUMNOも加わったマラヤ連邦構想に対抗し、人民憲法草案を採択した。そこでは、「ムラユ (マレー)」を血統ではなく国籍ととらえた点が大きな特徴である。出生地主義にもとづき華人やインド人の出自でもムラユ籍となる余地を残し、民族の違いを超えた権利として設定したのである。マレー民族の優位を認める多民族国家か、出自を越えた均質な民族の創出を志向するのかは大きな対立点であった。

しかし、1948年の非常事態の発令とともに、イギリスはPKMMにも弾圧を加えた。左派指導者の多くが逮捕されたが、逮捕を逃れてマラヤ共産党の武装闘争に合流した者もいた。アブドゥッラー・C・D (Abdullah C.D.)<sup>13</sup>、シャムシア・ファケー (Shamsiah Fakeh)<sup>14</sup>などは、マレー人により構成された第10連隊の指導者となった。マラヤ共産党は、構成員の大部分が華人であったことから、華人という民族を結びつけて語られることは少なくない。華人以外の共産党や武装蜂起参加者の存在が注目されることも、歴史の見直しの一つといえるだろう<sup>15</sup>。

こうした歴史の見直しが進んだ背景には、それを発信する媒体の登場も挙げられる。たとえば、2000年に設立されたSIRD (Strategic Information and Research Development Centre) は、こうした学術書、回顧録等の出版を多く手掛けている。SIRDのホームページでは、マラヤ独立の闘士や共産主義の革命家、政治犯たちの回顧録やモノグラフは地元の歴史の深刻なギャップを埋めるものであり、彼らの現代のマレーシアへの貢献を忘れるべきではないと主張しており、「歴史の見直し」を意識していることがわかる<sup>16</sup>。さらに、

<sup>13</sup> 本名チェ・ダト・ビン・アンジャン・アブドゥッラー (Che Dat bin Anjang Abdullah, 1923~)。KMMから第二次大戦期に共産党系のマラヤ人民抗日軍に参加し、戦後はPKMMに加わった。非常事態期にはマラヤ共産党で武装闘争を指揮した。回顧録として (Abdullah, 2005; 2007) がある。

<sup>14</sup> シャムシア・ファケー (1924~2008) は、PKMMに参加し、同党の女性組織・AWAS (Angkatan Wanita Sedar) を指導した。非常事態による非合法化後、共産党による武装闘争に参加した。回顧録として、(Shamsiah, 2004) がある。

<sup>15</sup> 前節で触れた国立博物館には共産党のパンフレットも展示されているが、そこには中国語、タミル語、マレー語のものが含まれ、構成員が多民族であったことが示されている。

<sup>16</sup> <https://sird.gbgerakbudaya.com/who-we-are/> (2018年3月最終アクセス)。

活字よりも自由度の高い言論空間としてインターネットの普及も指摘できる。1999年に開設されたネットメディア・マレーシアキニ (Malaysiakini)<sup>17</sup>など、政府に対して批判的な媒体は歴史に関する記事の発表の場ともなっている<sup>18</sup>。こうした流れのなかで、マレー人左派に関する研究やさまざまな形での言及が増えているのである<sup>19</sup>。

## 2. マレーシア史の視角

こうした動きは、マレーシアの歴史研究全体にはどのような影響を与えているのであろうか。ここでは、2017年に発刊されたアンダヤ夫妻著『マレーシアの歴史 第三版』をとりあげる (Andaya and Andaya 2017)。この書籍は、現在最も標準的な英語によるマレーシアの通史であり、国外の出版であることからナショナル・ヒストリーの束縛からは比較的自由的な存在である。1982年に第一版が出版され、2001年に第二版、2017年に第三版へと改訂されている。

その7章「新たな国家をめぐる交渉 (1942~69)」の冒頭「研究史の考察」においては、公文書の公開や当事者の証言により、新たな事実が明らかにされていることを指摘する。それにより、マレーシアの「建国の父」たちがいかに新たな国民を概念化したかについての理解を深めることができると述べられている (Andaya and Andaya, 2017: 260-261)。ただし、その後の具体的な歴史展開に関する記述は民族間の対立と交渉を基本として書かれている。たとえば、PUTERA-AMJCAの関係は、すべての民族集団を包含する用語を見いだせなかったことで最終的に崩壊したと評価される (Andaya and Andaya, 2017: 273)。

こうした民族を単位とする歴史叙述に対して、左派運動に関する研究は異なる視点を提示する。戦後から1950年に至る時期のマラヤの政治史をインドネシア (東スマトラ) と対照させて「マレー民族」の形成過程を描いたアリフィンは、右派と左派の民族概念をめぐる相違にくわえて、伝統的支配層に対抗した左派の西洋近代的な価値観 (民主主義など) を強調している (Ariffin, 2015)。この視点に立てば、王権を頂点とする右派の秩序が残り、左派が力を失う過程は「本物の国民国家の出現の機会の喪失」とみなされる (Ariffin 2017: 13)。マレー人左派の研究は、1950年代以降の歴史には連続しづらい。

サイド・フシン・アリは、PUTERA-AMJCAが多様な政治志向や民族的背景を持つ組織の連合である点を連盟党と対照させながら評価し、それを近年のマレーシア政治における野党連合の状況になぞらえている (Syed Husin Ali, 2017: 6-8)。左派の見直しの動き

<sup>17</sup> <https://about.malaysiakini.com/> (2018年3月最終アクセス)。

<sup>18</sup> たとえば、(Farish, 2002)は、マレー人左派の研究者ファリシュ・ノールのマレーシアキニに連載された評論をまとめたものである。

<sup>19</sup> 華人の比率が高いペナンに位置するマレーシア科学大学からも、左派運動を多く取り上げた論文集が出版された (Azmi and Abdul Rahman (eds), 2016)。

には、現在の政治的立場の相違が反映されているのである。これは、歴史を現在につながる過程としてとらえるのか、現在を相対化する事象ととらえるのかという歴史叙述の方法論の対立である (Cheah, 2007)。歴史の見直しは、マレーシア史という一つの歴史の叙述のなかに相反する勢力を取り込んでいけるのかという大きな問いでもある。

### Ⅲ 越境するムスリム

#### 1. 対抗勢力としてのイスラム政党

マレー人左派をマレーシア史に取り込むことのむずかしさは、歴史を国家の枠内で考えることの限界性を示しているようにも思われる。本節では、民族主義の右派勢力に対抗したもう一つの勢力として、イスラム勢力に焦点をあて、その動向について整理したい。島嶼部一带に広がるイスラムの特徴は、その国際性にある。脱植民地化には、マラヤを取り巻くシンガポールやボルネオ、インドネシアなど近隣地域との関係性の考慮も不可欠である。そこで、国境を越える人や情報のネットワークについても紹介する。

左派勢力が政治的な弾圧を受けるなか、1948年以降 UMNO に対抗したのはイスラム勢力であった。イスラムは、戦前のマレー民族主義の展開において重要な役割を果たしてきた。戦前には国境を越えたムスリムの往来があり、中東からイスラム改革主義思想が流入するなど、イスラムの政治運動の興隆がみられたためである<sup>20</sup>。

戦後の脱植民地化の過程で国境によるムスリムの分断が起これ、イスラム勢力は民族主義勢力の陰に隠れる形となった。しかし、マラヤ (のちマレーシア) の国政で UMNO に対抗したマレー・ムスリムの勢力として、現在のマレーシア・イスラム党 (Parti Al-Islam Se-Malaysia: PAS) につながるイスラム勢力があげられる。PAS の歴史が注目されるのも、歴史の見直しの作業の一部といえよう。

PAS の起源は、1951年に結成された全マラヤ・ウラマ協会 (Persatuan Alim-ulama Se-Malaya) であった。初代総裁は UMNO の宗教局長であり、当初は UMNO とのメンバーの重なりもみられた。しかし、やがて非常事態のもとで弾圧された急進派のウラマらが加入し、連盟党を結成して華人との連携に舵を切った UMNO に対する批判を強めた。1955年の選挙に際して、汎マラヤ・イスラム党 (Pan Malayan Islamic Party) として正式に政党登録を行い、その翌年にはブルハヌッディンが党首となって UMNO への対決姿勢を強めた。PAS は、イスラム勢力というだけではなく、左派の一部をも取り込む形で UMNO の対抗勢力となった (Farish, 2014)。

<sup>20</sup> 中東のイスラム改革主義は東南アジアに大きな影響を与えた。マラヤでも、カウム・ムダ (若者派=改革派) とカウム・トゥア (長老派=保守派) の対立などの形であらわれている (Roff, 1994: 56-90)。

## 2. 越境するイスラム知識人の視点（1）— ナドラ問題

くわえて、政治勢力としてのイスラムは、マラヤの枠にとどまらなかったことも指摘する必要がある。イスラムは国境を越えて広がる宗教であり、その人的ネットワークもマラヤという境界を越えるものであった。そして、マレー語もまた、マラヤ・シンガポール、インドネシアの境界をまたいで共有されていた。

ここでは、シンガポールで発刊されたマレー語雑誌『カラム』をとりあげたい。『カラム』は、1950～1969年にシンガポールで発刊された月刊の総合誌である。この20年間という発行期間の長さは、同誌がマレー・ムスリムに受け入れられていたことを示している。『カラム』の特徴は、イスラム志向の強さと越境性である。同誌は一貫してジャウィ（アラビア文字）表記を使用した。雑誌の創刊者エドルス（Edrus）<sup>21</sup>はインドネシア生まれのアラブ系であり、国境を越えた東南アジアのムスリムの連帯を強調した。『カラム』の執筆者には、シンガポール、マラヤにくわえて、インドネシアのムスリム知識人、エジプトなど中東で学ぶ留学生も含まれていた。しかし、同誌はマラヤを「祖国（tanah air）」とみなしており、マラヤの政治に対して積極的に意見を発信した。

発行地のシンガポールは、マレー民族主義よりもイスラム主義が優勢であった。マレー人が少数派であったことにくわえて、同地がムスリムの移民ネットワークの中心であり、ムスリムにおけるマレー人の比率も低かったためである。さらに、前節で触れたように、マラヤで非常事態が宣言され、左派指導者への弾圧が行われると、彼らの一部はシンガポールに避難し、急進派の勢力は強まった。ブルハヌディンは初期の『カラム』の有力な寄稿者であった。『カラム』の言説を見ると、マラヤのマレー人左派やPASとも異なる論調が存在することがわかる。

その一例が1950年にシンガポールで起こったナドラ（Nadrah）事件である。これは、第二次世界大戦中にジャワでキリスト教徒の両親からムスリム女性に引き取られた少女の親権をめぐる裁判と、それを契機として1950年12月に起こったムスリムと政府の衝突である<sup>22</sup>。裁判が両親側の勝訴に終わると、ムスリム群衆の抗議行動は18名の死者を出す

<sup>21</sup> 本名はサイドアブドゥッラー・アブドゥルハミド・アルエドルス（Syed Abdullah bin Abdul Hamid al-Edrus, 1911～1969）、『カラム』ではアフマド・ルトフィ（Ahmad Lutfi）など複数のペンネームを使用していた。オランダ領東インド・カリマンタンのバンジャルマシンでアラブ系の両親のもとで生まれ、シンガポールにわたって出版・文筆活動を開始し、1948年にカラム出版社（Qalam Press）を立ち上げた。彼の伝記として（Talib, 2002）がある。『カラム』は、1969年の彼の死去とともに停刊した。

<sup>22</sup> マリア・ヘルトホ（Maria Hertogh, 1937-2015）は、戦争によりオランダ軍人であった父が捕虜となり、アミナ（Aminah）というマレー人女性に養女として引き取られた。彼女は西ジャワからアミナの出身地であるマレー半島トレンガヌ州にわたり、ナドラという名でムスリムとして育てられた。オランダに帰国した両親はシンガポールのオランダ領事を通じてナドラの引き渡しを求めたが、アミナが拒否したため、シンガポールで裁判となった。

事件に発展し、ブルハヌッディンを含む多くのムスリム指導者が逮捕された。

この事件はマレー・ムスリムのメディアの大きな関心を集めたが、立場によって関心が分かれた。UMNOは、この件をシンガポールとマラヤという別政体の司法管轄の違いを理由に反対運動には積極的に関与しなかった。一方、『カラム』はこの件に強い関心を示した。改宗、結婚といった個人の宗教実践が公的な法制度によって否定されたことを批判し、独立したイスラム法制度およびそのもとで任命されたカーディ（裁判官）の権限が侵害されたことに抗議した（Qalam, 1951.1: 16-18）。非マレー人のムスリムが焦点となったこの問題は、イスラム主義者と民族主義者との違いをきわだたせた。『カラム』は、UMNOに代わり、宗教を適切に代表する新しい組織の結成を訴えたのである（Qalam, 1951.2: 17-19）。

この事件は、シンガポールのナショナル・ヒストリーという視角からはマイノリティの暴動とみなされ、公的な歴史叙述では過小評価されてきた。ターンブルによる英語の通史『シンガポール近代史 1819-2005』において、この事件は共産党が勢力を失っていく過程の一コマとして語られている（Turnbull, 2009: 247）。ただし、シンガポールでも近年歴史の見直しの機運があり、シンガポールにおける政府当局とマイノリティであるムスリムとの関係という視角からナドラ事件をとらえる論考があらわれている（Elina, 2006; Aljunied, 2009）<sup>23</sup>。

さらに興味深いのは、現在この事件はシンガポールよりもマレーシアにおいて関心が高いことである。ナドラ事件の詳細はすでに明らかにされているが（Hughes, 1980）、2000年以降マレーシアにおいて複数の図書の出版がなされている（Haja Maideen, 2000; Fatini, 2010）。2009年にナドラ（マリア）が死去したこともあり、2010年にイスタナ・ブダヤで彼女をモデルとした演劇として上演されるなど、関心が高まっている。多民族・多宗教社会であるマレーシアにおいて、宗教、民族、法的地位は密接に結びつく。個人の宗教実践（改宗、結婚）が制度によって妨げられる女性という悲劇は、現代性をもっているのである<sup>24</sup>。くわえて、1969年の5.13事件を契機とした憲法改正により民族を政治問題とすることが禁じられる一方、1970年代以降の「イスラム化」とともにイスラムの政治化が進んだ。マレーシア国内の与野党のマレー系政党がイスラムをめぐる正統性を争う構図は、脱植民地期のイスラム勢力への視線にも影響を与えている。

<sup>23</sup> シンガポールのナショナル・ヒストリーとは、リー・クアンユーおよび人民行動党からみた歴史であるが、それとは異なる視角から歴史を描こうという動きもみられるようになっている（Barr and Trocki (eds), 2008; Hong and Huang, 2008）。

<sup>24</sup> とくにマレー人という民族性とイスラムが結びついたマレーシアにおいては、結婚（離婚）に伴う改宗が民族の越境につながり、たびたび問題となる。2006～07年にイスラムの棄教を求めて法廷闘争を行ったマレー系女性の問題はその典型といえる（Tan and Lee (eds), 2008）。

### 3. 越境するイスラム知識人の視点（2）— マレーシア構想

その後も『カラム』はマレー人左派とは違った見解を発信し続けた。もう一つの例として、マレーシアの結成をめぐる言説をあげたい。1961年、マラヤ連邦首相のアブドゥルラーマンはマラヤ連邦とシンガポール、英領ボルネオのサラワク、ブルネイ、北ボルネオ（サバ）の統合によるマレーシア構想を発表した。隣国インドネシアによる強硬な反対が起こるなど紆余曲折があったものの、1963年にマレーシアは成立した<sup>25</sup>。ここにきて、マラヤの脱植民地化は近隣地域を巻き込む事態となった。

マラヤ連邦において、野党を構成した左派勢力はマレーシア構想に反対した。マレー人左派は、植民地の境界を越えたインドネシアとの統合によるマレー民族の大同団結を志向しており、インドネシアぬきの英領植民地の統合にすぎないラーマンのマレーシア構想はかえってその障害になるとみなした。マラヤ連邦のイスラム勢力を代表するPASもまた同様の立場をとった（Mohamed Nordin, 1974: 169-172）。

しかし、『カラム』は、マレーシア構想に賛成した。「将来はそこから半島とインドネシア、フィリピンを含むマレー諸島全域を統合し、真実や歴史にもとづいた本当のムラユ・ラヤ（Melayu Raya）<sup>26</sup> 連邦国家ができるだろう」と評し、理想実現のための第一歩とみなしたためである（Qalam, 1961.7: 7）。一方、インドネシアに対しては、スカルノ政権によるイスラム勢力の弾圧を痛烈に批判し、「地方の反乱」を主導している各地のイスラム勢力への支援を訴えた（Qalam, 1964.1: 3）。そして、インドネシアとの関係を重視するPASに対して、ボルネオの植民地化を目指すスカルノの「野望」を認識せよと迫った（Qalam, 1963.3: 19）。『カラム』の論説は、マラヤのイスラム勢力とは正反対のものであった。ここから、マレー・ムスリムの政治的主張がマラヤの与野党の対立だけでははかれない多様なものであることがわかる。そして、国境を越えてつながろうとするムスリムの動きは、「イスラム化」を経て現在へと連続していくのである。

『カラム』のような主張は、マレーシアにしても、シンガポールにしても、一国単位でみていたのではくみ取することは難しく、したがって現在十分に参照されているとは言えない。しかし、マレー語の言論空間は国境をまたいで存在しており、シンガポールやインドネシアからもマラヤ（のちマレーシア）の政治問題は参照されていた。脱植民地化においては近隣諸国もまた重要なアクターであり、マレー・ムスリムをめぐる歴史過程は、こうした幾重にも広がる世界の中で理解する必要があるといえるのではないか。

<sup>25</sup> ただし、ブルネイは不参加となり、シンガポールはマレーシアにいったん加入したものの、その後分離独立した。現在のマレーシアの枠組みが確定するのは、シンガポールが離脱した1965年のことである。

<sup>26</sup> 「マレーシア」は、当初マレー語ではムラユ・ラヤ（大マレー）と呼ばれた。これは、戦前のマレー人左派がインドネシアとの統合を目指して使用した語でもあった。

## おわりに

本論では、マラヤの脱植民地化に関する歴史の見直しの動きについて検討した。歴史の見直しは、新たな歴史的事実の発掘というだけでなく、現在的な視点の変化による認識の相対化という点でも常に行われている。本論は後者の側面を中心に研究動向を整理した。

近年のマレーシアの近現代史研究においては、ナショナル・ヒストリーを相対化する動きがみられる。民族ごとの政党の連盟による独立の達成、政権の運営というストーリーに対して、それに対抗した勢力に焦点をあてるものである。その一例がマレー人左派の運動であった。これは、民族横断的な政治運動に着目し、民族を単位として歴史を語る言説に異を唱えるという側面を持つ。

このことは、国民戦線と左派を含む民族横断的な政党連合が対峙する半島部における現在の政治状況と無縁ではない。独立期に形成された民族ごとの政治ブロックの揺らぎは、民族政党の連合の歴史を相対化する動きの出現をもたらしたといえる。歴史を単線的な過程ととらえないことは重要である。ただし、ナショナル・ヒストリーとの間の歴史認識をめぐる競合が生じ、結果として社会の分断を深めるといえる可能性もはらんでいる。

一方で、マラヤという政治的境界を越えてマラヤの政治や言論に関与しようとする勢力の存在に注目することも、歴史の見直しの契機となる。本論では、『カラム』の論説を紹介した。同誌は、マラヤの与野党の対立の構図を越えて、より広い視野でムスリムの連帯を訴えた。こうした動きは、体制とそれに対する抵抗を描くだけでなく、国家の枠組みを相対化し、様々な勢力の相互作用として歴史をとらえる視点につながる。

本論ではマレー・ムスリムに議論を限定したが、華人についても越境的な要素を持っており、同様の議論の方向性が可能かもしれない。いずれにせよ、国家や集団の枠組みが常に流動性を持つ海域世界のマレーシアにおいては、不断の歴史の見直し、多層的な歴史叙述が求められているといえるのではないだろうか。

## 参考文献

- Abdullah C. D. (2005) *Memoir Abdullah C.D. (Bahagian Pertama): Zaman Pergerakan sehingga 1948*, SIRD.
- (2007) *Memoir Abdullah C. D. (Bahagian Kedua): Penaja dan Pemimpin Regimen Ke-10*, Strategic Information Research Development.
- Ahmad Boestamam (2004) *Memoir Ahmad Boestamam: Merdeka dengan Darah dalam Api*, Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia.

- Aljunied, Syed Muhd Khairudin (2009) *Colonialism, violence and Muslims in Southeast Asia: The Maria Hertogh controversy and its aftermath*, Routledge.
- (2015) *Radicals: Resistance and Protest in Colonial Malaya*. Northern Illinois University Press.
- Andaya, B. W. and Andaya, L. Y. (2017) *A History of Malaysia 3<sup>rd</sup> Edition*, Palgrave.
- Ariffin Omar (2015 [1993]) *Bangsa Melayu: Malay Concepts of Democracy and Community 1945-50 Second Edition*, SIRD.
- (2017) The People's Constitution of Malaya: A Missed Opportunity for the Emergence of a Genuine Nation-State, in *The People's Constitutional Proposals 70<sup>th</sup> Anniversary Edition*, SIRD, pp. 13-25.
- Azmi Arifin and Abdul Rahman Haji Ismail (eds) (2016) *'Di Sebalik Tabir' Sejarah Politik Malaysia 1945-1957*, Penerbit USM.
- Bachtiar Djamily (1985) *Ibrahim Yaacob: Pahlawan Nusantara*, Pustaka Budiman.
- Barr, M. D. and Trocki, C. A. (eds) (2008) *Paths not Taken: Political Pluralism in Post-war Singapore*, NUS Press.
- Cheah Boon Kheng (2007) New Theories and Challenges in Malaysian History, in Cheah Boon Kheng (ed) *New Perspectives and Researches on Malaysian History*, The Malaysian Branch, Royal Asiatic Society, pp. 119-145.
- Chin, C. C. and Hack, K. (eds) (2004) *Dialogues with Chin Peng: New Light on the Malayan Communist Party*, Singapore University Press.
- Chin, P. (2003). *Alias Chin Peng: My Side of History*, Media Masters.
- Elina Abdullah (2006) "The Political Activities of the Singapore Malays, 1945-1959", in Khoo Kay Kim et al. (ed) *Malays/Muslims in Singapore: Selected Reading in History 1819-1965*, Pelanduk Publications, pp. 315-354.
- Farish A. Noor (2002) *The Other Malaysia: Writings on Malaysia's Subaltern History*, Silverfish Books.
- (2014) *The Malaysian Islamic Party 1951-2013: Islamism in a Mottled Nation*, Amsterdam University Press.
- Fatini Yaacob (2010) *Natrah (1937-2009): Nadra@Huberdina Maria Hertogh@Bertha, Cinta, Rusuhan, Air Mata*, Penerbit UTM.
- Firdaus Haji Abdullah (1985) *Radical Malay Politics: Its Origins and Early Development*, Pelanduk Publications.
- Fernando, J. M. (2002) *The Making of the Malayan Constitution*, The Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society.
- Haja Maideen (2000) *The Nadra Tragedy: The Maria Hertogh Controversy (new edition)*,

- Pelanduk Publications.
- Ho Hui Ling (2004) *Darurat 1948-1960: Keadaan Sosial di Tanah Melayu*, Penerbit Universiti Malaya.
- Hong Lysa and Huang Jianli (2008) *The Scripting of a National History: Singapore and its Pasts*, NUS Press.
- Hughes, T. E. (1980) *Tangled worlds: the story of Maria Hertogh*, Institute of South East Asian Studies.
- Kahn, Joel S. (2006) *Other Malays: Nationalism and Cosmopolitanism in the Modern Malay World*, NUS Press.
- Milner, A. C. (1995) *The Invention of Politics in Colonial Malaya*, Cambridge University Press.
- Mohamed Noordin Sopiee (1976) *From Malayan Union to Singapore Separation: Political Unification in the Malaysia Region 1945-65*, Penerbit Universiti Malaya.
- Mohamed Salleh Lamry (2006) *Gerakan Kiri Melayu dalam Perjuangan Kemerdekaan*, Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia.
- Mustapha Hussain (1999) *Memoir Mustapha Hussain: Kebangkitan Nasionalisme Melayu Sebelum UMNO*, Dewan Bahasa dan Pustaka.
- Qalam*, 1950-1969 <http://majalahqalam.kyoto.jp/> (2018年3月最終アクセス)
- Ramlah Adam (2003 [1996]) *Burhanuddin Al-Helmy: Suatu Kemelut Politik*, Dewan Bahasa dan Pustaka.
- (2004) *Gerakan Radikalisme di Malaysia (1938-1965)*, Dewan Bahasa dan Pustaka.
- Roff, W. R. (1994 [1967]) *The Origins of Malay Nationalism (Second Edition)*, Oxford University Press.
- Roslan Saadon (2009) *Gagasan Nasionalisme Melayu Raya: Pertumbuhan dan Perkembangan*, Karisma Publications.
- Rustam A. Sani (2008) *Social Roots of the Malay Left*, SIRD.
- Shamsiah Fakeh (2004) *Memoir Shamsiah Fakeh: Dari AWAS ke Rejimen Ke-10*, Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia.
- Syed Husin Ali (2017) The Relevance of the People's Constitutional Proposals Today, in *The People's Constitutional Proposals 70<sup>th</sup> Anniversary Edition*, SIRD, pp. 3-11.
- Talib Samat (2002) *Ahmad Lutfi: Penulis, Penerbit dan Pendakwah*, Dewan Bahasa dan Pustaka.
- Tan, N. and Lee, J. (eds) (2008) *Religion under Siege? Lina Joy, the Islamic State and Freedom of Faith*, Kinibooks.
- Turnbull, C. M. (2009) *A History of Modern Singapore 1819-2005*, NUS Press.

(つばい・ゆうじ 名桜大学)